歴史を歩く⑱

『戦国時代の群像 ～第三話　三州大乱への序曲～』

島津本家第11代当主島津忠昌が永正5年（1508年）に清水城で自害し、島津家史上最大の危機の幕が開いた。

忠昌の後を長男の島津忠治が継ぐが、27歳で死去。続いて13代当主の座に着いた忠治の弟の島津忠隆も23歳で亡くなった。いずれも戦国の世にありながら戦を好まず、温厚かつ学問好きとあって、島津氏内部の内乱を治めることができなかった。そして二人の当主の死によって、急遽島津本家の第14代当主を頴娃氏の養子に入っていた島津忠昌の三男島津忠兼（のち勝久）が継ぐこととなったのである。永正16年（1519年）のことである。

不幸にも島津忠兼が家督を継いだ時、島津氏の政権基盤は完全に弱体化していた。そしてそのような状況にあって、若干17歳であった忠兼を補佐する有能な家臣もいなかった。

そこで忠兼は、出水に拠点を持つ有力分家の薩州島津家第5代当主島津実久の助力の姉を正室に迎え、実久を頼って勢力回復を図ろうとしたのである。

この頃、大崎の地は志布志城主新納忠武の支配するところにあった。新納忠武は島津忠昌に対して謀反を起こし、忠昌自殺の原因を作ったと言われる人物である。

永正16年（1519年）に、島津氏に叛いた伊集院尾張守が曽於郡城（別名：橘木城　霧島市国分にある）に篭城をした時も、新納忠武は軍を率いてこれを援護した。後の大永3年（1523年）にこのことを理由に島津忠兼は新納忠武を攻めようとし、伊地知重周らに新納忠武の子忠勝の守る月野城を攻撃させたのであるが、結局敗れて、鹿児島に引き上げてしまった。

翌年1月には、高山の肝付兼興が櫛間城主島津忠朝の領する串良城を攻めた。串良城はかつて島津忠昌の家老職であった平田兼宗の城であったが、忠昌の命を受けた島津忠朝によって奪われ、忠朝の叔父平山忠康に与えられたものである。この頃忠康の子平山近久が守っていた。近久は肝付勢を城外に迎え撃ち、撃退に成功した。

大永元年（1521年）8月18日には、島津忠朝は軍を率いて肝付兼興の領する鹿屋城を攻撃したものの、兼興の返り討ちにあって大敗を喫した。

大永3年（1523年）8月、肝付兼興は新納忠武の子忠勝の協力を得て、串良における島津忠朝勢力の駆逐を図ろうと、再び串良城を包囲する。援軍の進路を完全に断たれた島津忠朝は、やむなく串良城を新納忠勝の二男忠常に明け渡した。

ところが、結局のところ新納忠常を串良城の城代とし、実質は島津忠朝の一族である島津忠吉が守っていたため、これを不服とする肝付兼興は、大永4年（1523年）11月29日の夜、島津忠吉の拠る串良城を攻めた。島津忠吉を討ち取り、串良城は肝付兼興の領するところとなった。

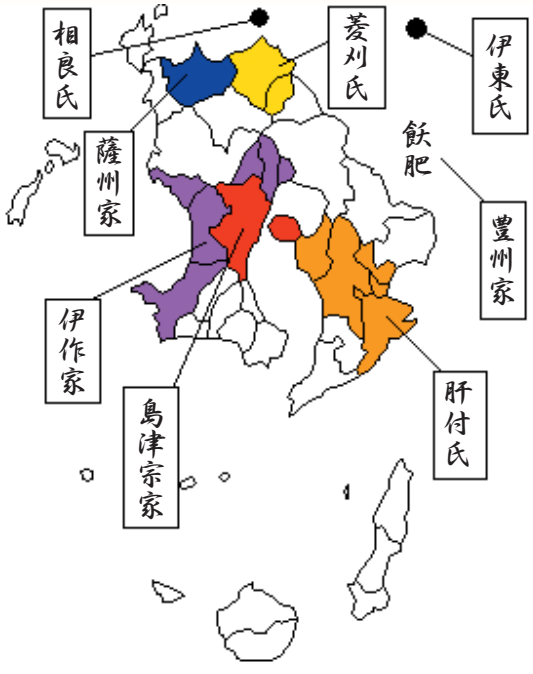
以上のように、島津忠昌を追い込んだ新納氏と肝付氏は、その子の代になってもお互いに協力しながら大隅地域における勢力基盤の確立を図り、島津氏と対立していたのである。

すでに島津忠兼によって国政を任されていた島津実久は、次第に権力を己の物にしたいと考え、忠兼に自分を継承者と認めるよう迫るようになった。これを嫌がった忠兼は大永6年（1526年）、相州島津家の島津忠良に支援をもらうようにし、忠良の子である島津貴久を養子に向かえた。

当然ながら島津実久はこれに猛烈に抗議し、ついには武力で忠良・貴久親子を排除し、実権を握ろうという実力行動に出るようになる。

これによって島津本家家督相続を巡って島津実久VS島津忠良・貴久の争いが勃発し、この対立がやがて薩摩・大隅・日向の各地を巻き込んだ三国大乱を巻き起こすこととなる。

（内村憲和）



▲忠兼（勝久）期の勢力図